

2023.10.24

2023. 10. 24.10 : 00
於飯田市・北一明記念館

北一明記念館開設式祝辞

金田 晋

北一明記念館開設、おめでとうございます。

このたび北さんの生まれ故郷、長野県飯田に北さんの名前を冠した記念館が誕生することになりました。北さんにとってどれほどうれしたことか。飯田には当地出身の知性と感性の巨人を顕彰する記念館がたくさんあります。その巨人たちと並ぶということは、北さんにはどれほど晴れがましいことか。

併せて、この記念館を作るため地道に今日までご苦労されてこられた皆様方に。あつく御礼申し上げます。

(1)

北さんは、信州に生まれ、生涯土と関わりつづけた作家です。その意味で、日本が誇る縄文人の末裔と言っていいでしょう。世界の名立たる文明はいずれも戦さと王朝交替を繰り返す歴史でありましたが、縄文文明は大きな戦さをせずに 1 万年を超える平和をつづけました。その土に力を吹き込んで土器にしたのは火、炎であります。記紀の神代篇では、イザナミのホトを焼いて火の神カグツチが生まれ、イザナギの剣に切り裂かれたその肢体からさまざまな産業が生まれました。北さんは陶の作家であり、したがって炎の作家であり、カグツチの末裔でもあります。縄文人の発明した土器に底の尖っている尖底土器があります。置物としては不安定ですが、火のまわりがよく、料理、調理に適していました。その尖底土器に、北さんのデスマスクは造形的に通じていないでしょうか。もちろんこちらでは煮炊きはできません。でも焼かれて溶けた民の心が内から外へ溢れこぼれてくる、通じていないでしょうか。人類の敵原爆の火に焼かれて、その無念をこめて「ノン」と叫ぶ少女たちの心が滲み出る造形です。

(2)

北さんの陶の造形はまずデスマスクでした。ふつうデスマスクは死者の顔から型どりです。でも北さんのそれはちがいます。原爆が投下された直下の半径 500 メートルの地上は温度 3000°C~4000°Cです。植物も動物も人体も燃えて溶けてしまいます。物のかたちは地面に溶融して失われてしまいました。その無形の、だが内の悲しみが北さんの焔の力で新しいデスマスクとなって復活します。

顔の右半分は、生きものたちのいのちの溶け入って焼けただれた土塊でしょうか。それだ

けではお世辞にも美しいとは言えません。だが左半分に生前の顔らしき形状が浮き出てきます。眼らしきものが見えてきて、そこから一筋の涙が頬をつたってたれているのでしょうか。くぼみに溜まって美しい輝きを発しています。カタルシス（浄化）。その小さな輝きはヨウ変となり、そこからヨウ変天目茶碗の原点となりました。

通常、わたしたち美学者は茶碗を手にとって、その全体的な美と品格、それと物質的な触覚感を誉めます。部分を誉めてそこで終わるとき、その批評は暗に全体への不満を洩らしているはずです。でも北さんのデスマスクはちがいます。じっくり部分から部分へ追いかけなければなりません。それからゆっくり、何度も部分にもどりながら全体を享受してください。1篇の詩を読むように享受してください。19世紀は全体（国家）を発見しました。だが20世紀は部分（市民）、あるいは細部（民衆一人ひとり）が大切です。20世紀美術史学の主脈を領導したアビ・ワールブルクは自身の墓標に「神は細部に宿り給う」と彫らせました。

（3）

頬につたう宝石のようなヨウ変の輝き、そこが独立してヨウ変天目茶碗が生まれました。茶碗のくぼみが作る無が、19世紀後半のヨーロッパの知識人、芸術家を魅了しました。1842年、老子道德経がはじめてフランス語に訳されました。ヨーロッパ語ではじめて老子が読めるようになりました。その第11章に茶碗のくぼみが作り出す無の極意が説かれていました。「埴埴以爲器。當其無、有器之用無」。わたし流に訳すと、こうなります。「土をこねて器をつくる、その無に当たるところで、器の用が果たされる。」茶碗の中にできるただのくぼみ、その何もないところが大切なのです。そう言えば、ヨウ変天目茶碗も南シナ南宋の地で生まれました。老子の仏語訳は無の思想がヨーロッパ思想史に現れる革命的な事件だったと、わたしは理解しています。

クールベが熱狂したことはかれの作品に暴力的に表れています。文学者ゾラもまた大きく影響を受けました。かれから習ったか、友人セザンヌも感銘を受けていたようです。かれの静物画の中の茶碗や壺の描き方を観ればわかります。以後東洋の茶碗は、ヨーロッパの哲学者や芸術家にとっての究極の哲学的境地でした。その茶碗が幻のヨウ変天目茶碗になる。それは秘跡でないか。日本の哲学者、美学者だけでなく、ルフェーブルやアダム・シャフやサマヴィルたちヨーロッパの哲学者、思想家をも夢中にさせました。欧米の最前線の哲学者たちが北さんの仕事場を訪れ、かれから茶碗作りの極意を学ぼうとしたのはよくわかります。

北さんには別の思いもあったはずですが。8月6日原爆投下の直下で被爆し、水を求めて川の中に沈んでいった民衆たちにせめてひと碗でも水を汲んで飲んでもらいたかった。そのいまわの民衆たちには、差し出された水を見て、その水に映るただの器（かわらけ）の底がヨウ変天目に見えたにちがいない。北さんの茶碗には悲しみが沈んでいます。だから北さんの造形は、まずデスマスクであり、次にヨウ変天目茶碗でありました。

(4)

広島には、自身信州出身で、反骨のジャーナリストであった北さんのお父さんをも知っていた中国史研究の巨人で、広島の原水爆禁止運動の中心でもあった今堀誠二先生（広島大学）がおられました。先生はまるで自分の息子のように北さんを愛し、その活動を支援されていました。今堀先生はある日大学講師になりたてのわたしに「美学から見てどうか」と批評を求められました。市内のデパートで開催されていた北さんの大きな広島展を、「見に行け」という勧めでした。それがわたしの北芸術との最初の出会いでした。

わたしは北さんを支援した哲学者、美学者の第2世代です。1978年、アメリカ・ニューヨーク近郊のスリーマイル島で起こった原発事故に怒る市民たちの大きなデモの先頭に、北さんのデスマスクを写したプリントが掲げられていました。ノーベル賞にノミネートされたことも北さんから聞きました。国内で開かれた北さんの展覧会の盛況も北さんからその都度聞きました。それらは日本における原水爆禁止運動の盛り上がりと呼応していました。中国・上海でのスケールの大きな国や市をあげての大展覧会も、北さんからまるで実況放送のように知らされました。

その間1980-90年代、わたしはほとんどすべての北さんの書物やカレンダーや展覧会リーフレットに「讚」をよせてきました。その都度新しい文章を書きつづけました。98年には、北さんの大きな個展を広島で企画し、最後まで仕切りました。

世紀が変わると、原水爆禁止世界大会の運動にも世代交代の波が押し寄せていました。北さんも教えを受けた安井郁教授（法政大学）を先頭とする世代から大戦を体験しなかった世代への運動形態の転換が求められていたのかもしれませんが。北さんの体調も、長年の活動からくる疲労に耐えられなくなっていました。

2005年、わたしは雑誌「世界」（岩波書店）に「被爆60年-芸術は反核を闘えるか」という論考を載せました。北さんの創作活動と世界に及ぼした影響への、その時点での総括のつもりでした。北さんの反戦反核運動に果たした意義にも十分でないが、言及させていただきました。

わたしは、芸術と政治（運動）を安易に結びつけるのに抵抗感を感じてきました。政治は問題の解決を求めます。だが芸術は問題を問うことを本領とし、問題の被膜を剥ぎ取り、深部を抉り出すことを本領とする。そう、わたしは思っています。問いへの答え（解決）はただ一つではありません。だが現実の政治は往々にして、みずからの解決を正当化するために、解決の無数の可能性を隠蔽し、「それしかないんだよ、我慢して。」とその解決をおしつけてきます。芸術は問うことを放棄してはなりません。

北さんは問うことから逃げませんでした。広島、長崎、それからビキニ環礁を経験して、反戦反核を叫びつづけました。民衆のいのち、心の問いを隠蔽してはならない。陶を通じて問いつづけようと思いました。それはこの列島に万年を超える時間スケールで育った縄文文明の現代相であるように思います。北一明はその落とし子だと思います。

(5)

縄文文明がよく似合うこの信州の地に北一明記念館が本日開設されたこと、おめでとうございます

この北さんの記念館が、やがて北さんの仲間や北さんに触発された若い作家たちも加わる増殖する記念館に成長してゆくことを願ってやみません。